

石田波郷の句碑を巡る③ ～^{じょうしゅうじ}定秀寺～

校長 玉井 啓二

松山市内には、本校の卒業生で昭和を代表する俳人である石田波郷の句碑が数基設置されています。本年度は、それらを巡り、句碑に記されている波郷の俳句を鑑賞しています。今回はその第3回目で、松山市神田町の定秀寺に設置されている句碑を紹介します。

下の写真の句碑は、定秀寺本堂の前、「本願寺第二十四代ご門主ご巡回記念」に植えられた印度菩提樹の後ろに設置されています。この句碑に記されているのが、次の俳句です。

おく
泉への道後れゆく安けさよ

石田波郷

この俳句の季語は「泉」。夏の季語です。この句は、句集「春嵐」に収録されていて、1952年（昭和27年）に軽井沢で詠まれた句として知られています。

句の意味としては、「泉に向かって、友人に後れを取って歩いて行けるので、何と安心感があることよ。」といったところでしょうか。この時の波郷は、友人と一緒に軽井沢の森を散策していました。患っている肺の病気の手術をした後だったために、どんなに急いでも、また友人が気を使ってゆっくり歩いても、息が切れて遅れてしまったそうです。



この句について、最下段の【引用】に挙げている「俳句の教科書」では、次のように解説されています。含蓄のある素晴らしい解説ですので、少し長くなりますが引用してみます。「波郷の人生において、自分のペースでいくことの大切さをかみしめている句です。波郷は若い頃から手術と入退院を繰り返す病と闘う人生でした。そのため、健康な人であれば簡単にできることも、波郷にはできないこともありました。この散策も同様に友人より遅れており、それに対して安けさ（安心感）があると言っています。それは波郷が『病弱でも遅れることで心静かに楽しく思うこともある』と感じたからです。つまり、人より遅れる自分を肯定することになり、健康な人では感じられない境地でもあります。波郷は後にこの句を『成立の事実を離れて私の心の置場所のような句になった』と語っており、自分のペースの大切さを感じています。人生において自分のペースを大事にすることが難しいと感じる人が多いからこそ、愛される句となっています。」※1

以上の引用を踏まえ、ここでは、友人に後れを取った際、波郷が「安けさ」と表した安心感を抱くことができたのはなぜかを考えてみたいと思います。一つは、目的地の泉への道が分かっていて、しかも友人は先に行ってくれていたからでしょう。目的地までの行程が分かり、先導の者がいるので、道に迷うことなく一人で歩いて行けるという安心感があつたはずでした。また、目的地の泉は、清らかな水がいつまでも絶え間なく湧き出ており、この目的地が変わらず在り続けるということも波郷の安心感につながっているように感じます。もう一つは、後れても、それをとがめる人がいなかったからでしょう。同行した友人は、波郷が後れてしまう事情を理解していたので、後れることに共感的であつたはずでした。さらにもう一つは、後れるからこそ、波郷に見ることができる風景があつたことも考えられます。これらのことが、友人に後れを取っても得られた安心感の要因であつたと想像されます。

このように解釈すると、この句からは、次のような教育に関する重要性が浮かび上がってきます。

- 子供たちが学習を進めたり生活を送ったりするペースには一人一人に特有のものがああり、そのペースで得られるものがあるので、一人一人のペースを保障することが大事であること。
- 一人一人のペースを保障するためには、安心感をもたせることが大事であること。
- 一人一人が安心感をもつためには、ゴール（目的地）とプロセス（行程）が分かって先の見通しがもてるようにすること、及び周囲の者が一人一人のペースを肯定的・共感的に理解すること。

今回紹介した句は、学校教育や家庭教育に携わる者に大きな示唆を与えてくれているように感じます。

【引用】※1 俳句の教科書 <https://haiku-textbook.com/izumiheno/>